

幼児の性格と文化的枠組*

—都市幼稚園児の横断的研究1—

学習院大学

東京大学

詫摩武俊

依田明**

この研究は、名古屋大学医学部精神医学教室、村松常雄教授を長とする総合研究「日本人の性格と文化」の一部として行なわれたものである。研究費はロックフェラー財団の基金によつた。ここで行なう報告は、総合研究の報告書の一部であり、第24回日本心理学会大会においてその概略を報告した(10, 30)。

I 目 的

上記の総合研究班において、われわれに課せられた任務は、親の育児方法・養育態度と幼児の性格形成の関係を、field surveyによつて明らかにすることであつた。この課題を十分に解明することはできなかつたのであるが、その詳細は研究班の報告書にゆずる。ここでは、その研究のために考案し使用した幼児の性格検査とその結果を中心に報告する。

われわれの課題であつた親子関係と性格の問題は、アメリカではかなり以前から、わが国でも戦後、きわめて多くの研究者がさまざまな角度から検討を続けている問題である(14, 15, 16, 24, 26, 29)。最近においても、第23回日本心理学会大会、第27回応用心理学会大会において、この問題に関するシンポジウムが持たれ、さらに個々の研究発表は多数なされている。いまここで、過去の研究の成果をふりかえつてみることはさけたいと思う。すでに、多くのアメリカの研究も紹介されているし、東西の研究の要約も数多く出版されているからである(1, 3, 11, 13, 22, 31)。

わが国においても多数の研究が行なわれたのであるが研究の量に伴つて成果はあがつているとはいえないようだ。これはこの課題へのアプローチの困難さを示していることもたしかであろうが、いささか安易な態度で課

題にのぞみ、アメリカでのやりかたをそのまま踏襲し、小規模な形で日本でやつてみたというような研究も少なくないように思える。したがつて、親子関係と幼児の性格に関する一般的公式や体系的な理論は望むべくもなく断片的な小さな資料の集積というのが、この分野の現状といえるであろう(4, 5, 6, 8, 9, 19, 21)。

従来、わが国で行なわれたこの種の研究の弱点のひとつとして、幼児の性格のとらえかたがあいまいであつたということが考えられる。多くは教師や保母、あるいは母親による評定を用いて幼児の性格をとらえているが、妥当なものであろうか。親子関係との関連を見出すことが主眼である研究において、一方の変数である幼児の性格をとらえる方法として十分に適切な方法であるだろうか。幼児の性格を測定すべき適切なテスト法が見あたらないために、他人の評定によらねばならなかつたのであるが、正確さを欠く結果を導くことになつたのは否めない。

われわれの出発点はここにある。まず幼児の性格をより正確に、より客観的にとらえる方法を探索した。そして、いちおう満足できるテストを作りあげた。このテストを、4才から6才までの幼児に施行した結果、それぞれの幼児がおかれている社会的・文化的な位置によつて性格に差があることが明らかになつた。

II 方 法

われわれが、ある幼児の性格を記述しようとするときかれの1日の行動をつぶさに観察し分析するならば、かれの性格のある面はかなり正確に表現することができるであろう。このような観点から、次の諸目標が実現されるようなテストを製作した。(注)

1. 対象は就学前の幼児とする。

(注)テスト製作の出発点において(27)からヒントを得た。

* Child personality and cultural background.

** by Taketoshi Takuma (Gakushuin University) & Akira Yoda (University of Tokyo)

2. 幼児が、日常生活において示す行動をできるだけあるがままの姿でとらえ、その行動から、かれの持ついくつかの行動特性ないし性格特性を抽出する。
3. 幼児の家庭の状態や雰囲気、家庭内の人間関係も推定することができる。
4. 横断的研究のための道具として使用しうると同時に、個人的な分析も可能である。
5. 対象が幼児であるから、特に被験者は平易な態度でテスト事態にはいることができ、そしてある時間テストに対する興味を失わないようにする。

このテストは20枚のテスト・カードからなる。26×18 cmの白いカードに、幼児が日常経験するような事態がかなり具体的にかいてある(注)。被験者にカードに描かれた事態を説明し、絵の主人公や他の登場人物の行動を質問し、それを口述させるのである。このテストは一見TATもしくはCATに似ているが、被験者に絵の中の主人公とかれ自身を同一視させ、カードの事態でかれがどのような行動をとるかを質問しているわけである。したがって、むしろ質問紙法を改めたものと考えるのが適当である。ただ、単なる質問紙法と違って、可能なかぎり偽りの応答を排し、また解釈や反応の多様性から意識的になされる応答以上のものを期待しようという点で、投影法的な要素も加味している。

使用するテストカードは、被験者の性によつて異なる。男児に使用する20枚のカードすべてに登場する主人公の名前は「太郎さん」であり、女兒に用いるすべてのカードに登場する主人公は「花子さん」とよばれている。ここから、われわれはこのテストをかりに「太郎・花子テスト」とよぶことにした。男児用カード、女兒用カードは主人公が異なるのと、かれらの友人が主人公と同性であるほかは、描かれた事態は1枚を除き全く同じである。

この報告では、20枚のカードのうち7枚のカードの分析結果のみを扱う。7枚のテストカードの内容をTable 1に表示し、そのうちの4枚をFig. 1に示す。

このテストは個別テストであつて、検査者は被験者と適当なラポートを確立した後、つぎのような教示を与えテストにとりかかる。

教示

これから太郎さんという男の子(または、花子さんという女の子)がかいてある絵をたくさん見せてあげ

(注) 原画は画家である名古屋女学院短期大学講師池田初子氏に依頼した。実際のテストカードに使用したものは原画から複写器で複写した関係上白一黒でかかれた絵が白一濃紺となつた。

Table 1 テスト・カードの内容

カード番号	登場人物(主人公は除く)	カードに描かれた状況
3	母	朝、主人公は眼をさまし、フトンの上で半身を起こす。母親は隣室にいる、後姿がみえる。
4	幼い子ども	主人公は登園の途上の道路。主人公より幼い子どもがころんで泣いている。
10	同性の友人たち	公園のブランコ。主人公は乗る順番を待つて友だちと1列にならんでいる。主人公より年長の児童が主人公にいじわるをいう。
11	同性の友人	友人の家。友人はすてきなオモチャで遊んでいる。主人公はいつしよに遊ぶことを拒否され、部屋の入口に立っている。
13 (男児用)	成人の子どもたち	主人公はお使いの途上。カイモノカゴをさげている。ガラスのわれた窓から男が首を出す。バットをかついで数人の子供たちが逃げてゆく。
(女兒用)	友人友人の母	友人の家。部屋のカラカミが破れている。友人の母親は主人公と向きあつて立っている。友人はホウキを持つて隣室にいる。
15	友人たち見なれぬ子ども	主人公は友人たちと戸外で遊んでいる。その側にみすぼらしい同性の子どもが立っている。
19	父、母	夜。父母のいる部屋の廊下で、主人公が暗い便所の方向を眺めている。

ますよ。太郎さん(花子さん)は——さん〔被験者の名前〕と同じとしで——つ〔被験者の年令〕です。太郎さん(花子さん)は——さんと同じように、幼稚園にいつています。いまから、太郎さん(花子さん)や太郎さん(花子さん)のお母さんやお友だちが、いろいろなことをしている絵を見せてあげます。絵をみながら太郎さん(花子さん)のお話をいつしよにつくつてゆきましょうね。

ついで、カードを1枚ずつ提示し、登場人物と状況を説明しつつ、太郎さん・花子さんやお母さんの行動を聞き出してゆく。必要な質問も適宜加えられる。説明と質問の例は付表1に示す。

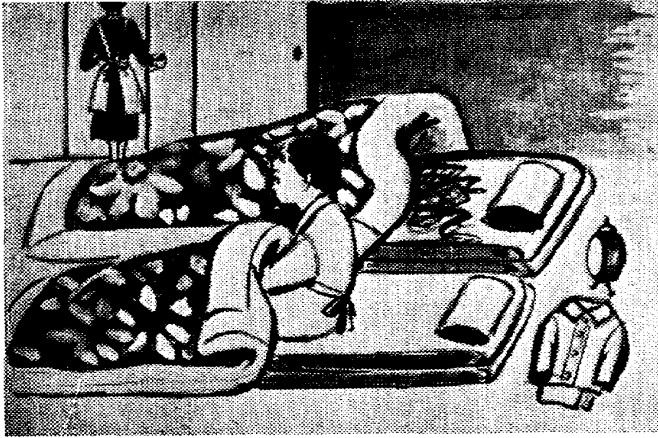
III 被験者および調査方法

わが国の大都市であるN市の市立幼稚園5、私立幼稚園1、計6つの幼稚園に通園している幼児176名を被験者とした。かれらの年令は4才3カ月から7才1カ月にわたつている。

なお、すべての被験者は実の両親と同居している。母親の平均年令は32.4才である。厳密なサンプリングをしたわけではないし、調査がしやすいという点から幼稚園を

Fig. 1 テスト・カードの1例

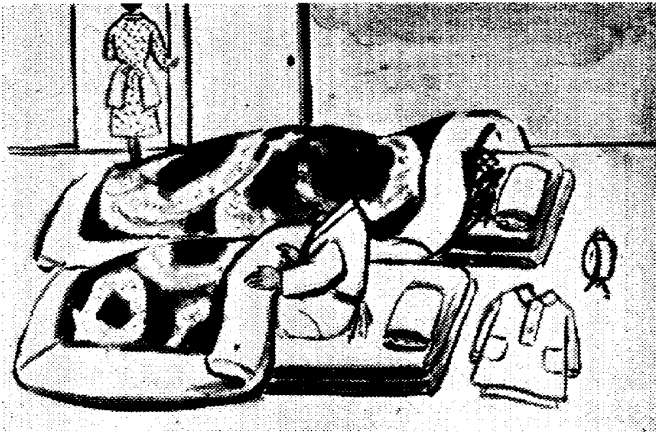
男児用 カード 3



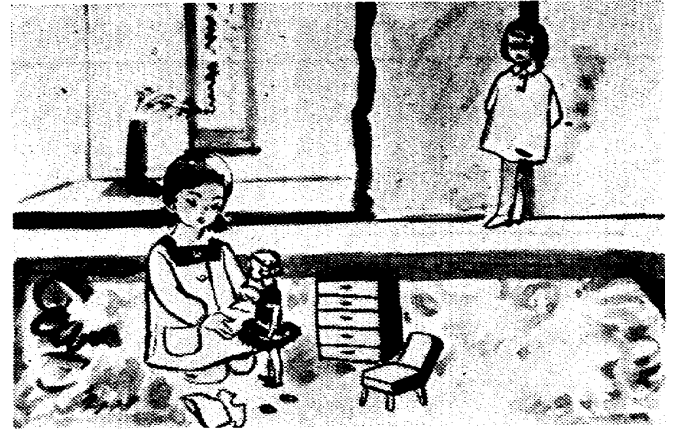
カード 11



女児用 カード 3



カード 11



選んだので、都市の幼児一般の傾向を調査したとはいえない。大都市の幼稚園児に関する調査といえよう。

テストは、それぞれの幼児が通園している幼稚園の一室で、調査者と1対1で行なわれた。

ごく一部の幼児は家庭においてテストを受けた。調査は1958年11月から59年の2月にかけて行なわれた。調査者は、名古屋大学医学部精神医学教室に所属するソーシャル・ワーカーを主体とする、いずれも幼児の取り扱いになれ、インタビューの技術を十分に身につけた者たちであった。

IV 分析方法

このテストは、幼児の性格の3つの側面をとらえることができる。すなわち、Independence—Dependence, Aggression—Withdrawal, Warmth—Coldnessの3側面である。この3つの性格の側面は、従来の研究においてもしばしば用いられているし、われわれもいわゆる overt behavior からつかみうる重要な性格特性と考えている。

3つの性格の側面を Table 2 のように定義する。

Table 2 3つの性格の側面の定義

Independence	+	他人の助力なしに独力で行動することができる。ある程度の圧力があつても自己の所信を表明することができる。
Dependence	-	他人に依存し、助力を求める。自己の所信を表明することができない。
Aggression	+	自己の欲求が満たされぬ場合、障害を直接的な行動によつて除外しようとする。乱暴などの攻撃的行動により自己の欲求を満たそうとする。
Withdrawal	-	自己の欲求が満たされぬ場合、障害の優位を認め、自己の欲求を放棄する。いわゆる攻撃的行動はとらない。
Warmth	+	他人への同情心があつく、思いやりがある。
Coldness	-	他人に対し冷酷。他人の不幸に関心がない。

Independence—Dependenceはカード3, 13, 19の3枚から, Aggression—Withdrawalはカード10, 11の2枚から, Warmth—Coldnessはカード4, 15の2枚から, それぞれ計測される。7枚のカードおのおの幼児の反応に対して, Table 2の定義に従って, +, 0, -, 3段階のうちいずれかの粗点が与えられる。各カードごとに全被験者の粗点の平均値および標準偏差を算出し, それに基づいて標準点を定める。各被験者の粗点をカードごとに標準点に換算し, 3つの性格側面ごとに加算する。加算された標準点の和を, 被験者のそれぞれの性格側面の得点とする。

幼児の反応に粗点を与えるときの判定の基準の例は, 付表2に示してある。

全被験者の3つの性格の側面それぞれの得点の間の相関を記したのが Table 3 である。

Table 3 3つの性格側面の間の相関係数

	Agg.—Wit.	War.—Col.
Ind.—Dep.	.12	.11
Agg.—Wit.		.01

幼児の性格としてとらえた3つの側面の間には, ほとんど相関はない。したがって, いちおうこの3つの側面は, それぞれ独立したものであると考える。

V 結果と考察

1) 性

93名の男児, 83名の女児の3つの性格の側面について計測した結果を Table 4 に示す。

Table 4

N	男 児		女 児	
	m	SD	m	SD
Ind.—Dep.	.32	1.89	-.06	1.74
Agg.—Wit.	-.29	1.91	-.71	1.51
War.—Col.	-.15	1.41	-.33	2.07

男女の性格の差は, いずれの側面においても有意な差とはいえない。しかし, 男児は女児にくらべると, より Independent であり, Aggressive である。男児はすでにいわゆる男らしい性格を持ち, 女児はすでに女らしい性格を持っていることは興味深い。親たちは, 男児には男性の役割りを女児には女性の役割りを期待し, それぞれの役割りを習得させるべく育ててきた結果に他ならな

いと考えられる。親が子どもに期待している役割りは, 明確に意識されてはいないであろう。文化的・社会的に認められ, 慣習化したものが, 知らず知らずのうちに親たちの行動にとりいれられているのだ。男児にはズボン, 女児にはスカートをはかせることがごく自然に行なわれているように, 子どもが男児であるか女児であるかによつて, 育児全般にわたつてなんらかの差異があるに相違ない。この差異はごく自然なものとして受けとられているから, 普通は意識されないと考えられる。だからこの差異を母親に直接的に質問しても, 明確な回答は期待できない。

2) 年令

被験者をそれぞれの年令により, ①5才5カ月以下, ②5才6カ月～5月11カ月, ③6才0カ月～6才5カ月 ④6才6カ月以上の4つのグループにわけ検討した。

Warm—Cold の側面で④群は①群より Warm である ($p < .01$)^(注)。また, 年令とテスト・スコアの相関係数は.20 である。年令の増加に従つて Warm になることを示している。他の2つの側面では明確な差は得られないが, 年令が増加すると, やや Independent になる傾向がみられる。

このテストを小学校児童に施行すると, 反応が同じようなものになり, 個人差が現われにくくなる。かれらはどう答えればよい子と認定されるかを心えている。模範答案的な反応にかたよつてしまうのである。この模範答案を分析すると, 極端に Independent, Withdrawal, Warm になる。これはこのテストの適応範囲の限界を示すものでもある。

3) 同胞の中での位置

被験者の同胞の中での位置を, 同胞数やその構成とは無関係にいちおう次の4つに分類し, それに従つて幼児を4つのグループにわけ検討した。①長子, ②中間子, ③末子, ④ひとりつ子。本来ならば, この4群の被験者の数がほぼ等しいことが望ましいが, 特にこの点のみに留意したのでないため, われわれの被験者の中には長子と末子が多く, 中間子とひとりつ子は少数である。テスト結果を男女別に Table 5 に表示する。

男児ではひとりつ子が最も Dependent である。末子は最も Withdrawal で, 長子との差は $p < .05$ で有意である。なお, 最も Aggressiveなのは中間子である。女

(注)テスト・スコアの平均値の差はt検定を行なつた。分散に差のある場合はコクラン・コックス法によつた。

Table 5

		長 子		中 間 子		末 子		ひとりつ子	
N		31		10		42		10	
男 児		m	SD	m	SD	m	SD	m	SD
	Ind.—Dep.	.48	1.48	.20	1.89	.61	1.85	-.30	2.53
	Agg.—Wit.	.10	1.91	.40	2.66	-.88	1.61	-.20	1.40
	War.—Col.	-.26	1.32	-.20	1.08	-.12	1.42	-.10	1.76
N		32		8		31		12	
女 児		m	SD	m	SD	m	SD	m	SD
	Ind.—Dep.	-.03	1.66	-.25	1.92	.03	1.66	.17	1.77
	Agg.—Wit.	-.73	1.54	-1.75	1.03	-.45	1.88	-.83	1.52
	War.—Col.	-.21	1.01	-1.00	1.00	-.03	1.38	-.75	1.48

児では逆に、ひとりつ子が最も Independent である。最も Withdrawal なのは中間子で、末子は最も Withdrawal でない。この差は $p < .01$ で有意である。

男児と女児とで全く逆の傾向が見出されたが、これは同胞の中の位置だけから、親の期待する役割りがきまってくるのではないことを示している。単に、はじめての子どもだからとか、2人目の子どもだからだけでは明確な役割りはきまらない。はじめての男児、2人目の女児ということで、はつきりした役割りがきまってくるのだ。親の期待する役割りが具体的にどのようなものなのかは今後に待たねばならぬが、われわれの被験者の親たちの意識の中に、昔から受けつがれた封建的な価値観が存在することは否定できない。家中心主義、女性蔑視、長男継承による家父長制などにもとづく男女の役割りの差が子どもに対する態度に強く反映していると考えられる。

ここでは、同胞構成・同胞数を無視した概略的な分析しか行なっていない。じつは、ひとりつ子と同胞数・同胞構成を無視した長子、中間子、末子は本来同一のレベルで論ずべきではないのである。たとえば、長子といつても、弟がいる長男か、妹がいる長男かによつて、かれに対する親の態度も異なり、性格も当然ちがっている。たしかに、われわれの被験者のうちの2人同胞の長子についてみると、次のような差があるのだ(付表3参照)。男児の場合、弟を持つ者は妹を持つ者よりかなりの程度 Independent であり、Aggressive である。女児の場合は逆に、妹を持つ者は弟を持つ者より、はるかに Independent である。($p < .05$ でこの差は有意である。) さらに、2人同胞の末子には、上述の長子の場合のような差は見出しえないのである。

また(18)によると、異性同胞の一人むすこ、一人娘について性度と行動特性を調査したが、男児には男性性格の減少がみられ、全体としてひとりつ子の性格を持つとしている。

われわれの結果はむしろ逆である。同胞がすべて女である男児は、われわれのいう意味での男らしさが強調され、同胞がすべて男である女児は女らしさが強調されている。そしてかれらの性格は、ひとりつ子の性格に近いとはいえないのである。

われわれは不正確なグルーピングしかできなかつたが、とにかく同胞の中での位置がちがうと、性格にも差があることを示した。その差が、具体的にどのようなものであるかをさらに明確にするためには、同胞構成・同胞数を、なお詳しくいえば同胞の年令の間隔を考慮しなければならぬ。そのうえではじめて、それぞれの同胞の中での位置に対する親の役割り期待というものも、はつきりと具体的にすることができよう。

4) 家族形態

幼児の属する家族をその構成からつぎの2つに分類しそれに従つて幼児を2つのグループにおいて検討した。①夫婦家族—父母と子どものみからなる家族。②直系家族—祖父母が父母および子どもと同居している家族。結果は Table 6 のとおりである。

はつきりした差ではないが、夫婦家族の幼児は直系家族の幼児にくらべ、より Independent でより Aggressive な ($p < .10$) 傾向を示した。

一般的な印象であるが、直系家族では幼児は母親を含めた家族全体から甘やかされているように思える。母親

Table 6

N	直系家族		夫婦家族	
	m	SD	m	SD
Ind.—Dep.	.04	1.88	.30	1.79
Agg.—Wit.	-.86	1.66	-.36	1.87
War.—Col.	-.28	1.34	-.22	1.42

と祖父母が、幼児の愛情を得るべく競いあうということがあるのだろうか。アメリカでの研究によると(17)、祖母が同居している母親は、祖母が同居していない母親にくらべ、子どもに対し厳格な態度をとっている。祖母についても同様であるという結果がある。日本での研究では(7)、祖母の方が母親よりも溺愛的で、専制的でないという結果を出している。この相違は当然であつて、日米両国それぞれの社会での一般的な育児観にも相違はあるし、両国の母親の位置は非常に異なっている。わが国では、姑に対し嫁は弱者である。われわれは、他の調査で多くの母親と面接したが、涙ながらに姑への不満を語る母親は意外に多かつたのである(上述の研究(7)によれば、約6割の母親が祖母とときおり育児に関して意見のくいちがいをおこしているという)。嫁—姑問題がジャーナリズムなどでは、にぎやかに論じられてきたが、その心理的側面は必ずしも精密に検討されていない。特にこの問題の幼児の性格形成への影響はほとんど取り上げられていない。興味深い問題が数多くかくされていると思われる。

5) 階層

それぞれの幼児の父親の職業によつて、階層を次の4つに分類し(注)、それによつて、幼児を4つのグループにわけて検討した。①資本家階層—大企業の経営者。②旧中間層—自家営業者、地主など。③新中間層—いわゆるホワイトカラー。④労働者層。われわれのサンプルのかたよりのために、資本家階層と労働者層は非常に少数である。ために主として新旧中間層の間の比較となつたが、両者の間に顕著な差は見出しえなかつた。

子どもが属する社会階層によつて、それぞれの階層に特有の育児方法(離乳開始の時期、排便便訓練をはじめめる時期、叱り方など)があり、その結果幼児の性格に差が生ずるとする考え方は古くからある。特にアメリカに

(注) 4つの階層の設定および分類方法は総合研究班に属する社会学者の示唆によつた。

において、階層による育児法の差を見出そうとする研究は多い(2, 12, 25)。われわれも、親の属する階層が異なればかれらが子どもに対して持つ期待、子ども親などにも当然かなりの相違があると考えた。しかしこの調査では、資料のかたよりのため、両極端が少数で比較することができなかつた。中央に位置する新旧両中間層の間に、われわれの他の調査では2, 3の細かな育児方法については差異がみられたが、今回調査した幼児の性格に関しては差はなかつた。新中間層に属する者の中には現在の世代になつて、旧中間層から移行したものが多数含まれている。機械的に2つの階層に分類しても、それぞれの母親たちが、はつきり区別されるような階層所属意識を持っているとはかぎらないであろう。

6) 母親の年令と学歴

母親の年令によつて、幼児を3つのグループにわけて検討したが、目立つた差は得られなかつた。

母親の学歴は次の3つに分類し、それによつて幼児を3つのグループにわけて検討した。①初等教育—尋常、高等小学校、新制中学校卒業。②中等教育—高等女学校、新制高等学校卒業。③高等教育—高等専門学校、短期大学、旧新制大学卒業。結果は Table 7 に示す。

Table 7

N	初等教育		中等教育		高等教育	
	m	SD	m	SD	m	SD
Ind.—Dep.	.26	1.54	.37	1.81	-1.00	1.73
Agg.—Wit.	-.83	.81	-.47	1.86	-.18	1.89
War.—Col.	-.57	1.24	-.19	1.44	-.05	1.33

初等教育を受けた母親を持つ幼児と、中等教育を受けた母親を持つ幼児の間には大きな差異はない。高等教育を受けた母親を持つ幼児は、他の2群の幼児よりはるかに Dependent であつた ($p < .05$)。

母親の受けた教育の程度によつて、母親の子ども観、役割期待も異なり、それが具体的な育児法に反映され子どもの性格にも差を生ずると考えられる。ここでも資料のかたよりのため、被験者は中央に集中し、両極は少数であつた。それでも、高等教育を受けた母親を持つ幼児の性格は、他の2つのグループとはいささか異なつていた。高等教育を受けた母親は、やや特殊な位置をしめているようだ。一般的にいえば、かれらは子どもを甘やかしがちで、いつまでも赤ん坊扱いにしているように思

われる。

IV 要約と結論

1. 就学前の幼児の性格検査として、幼児が日常経験する事態を線画でかいた20枚からなるテストを製作した。幼児が日常生活で示す行動を、なるべくありのままの姿でとらえ、その行動から、かれらの性格を抽出しようとするものである。質問紙法の変型というべきテストである。

2. この報告は、テストから抽出された幼児の3つの性格側面、独立的である度合い、攻撃的である度合い、心のあたたかさの度合いに対して、幼児の性、年齢、母親の学歴など7つの要素がどのような影響を与えているかを検討したものである。被験者は大都市の幼稚園児176名である。

3. 選ばれた7つの要素は、その属性によつて次の3種類に分類される。第1は幼児の持つ属性—幼児の性・年齢・同胞の中での位置—、第2は幼児が生活している家庭の持つ属性—家族形態・階層—、第3は母親の持つ属性—母親の年齢・学歴—である。この中で、幼児の性格に最も強く影響しているのは、第1の幼児の持つ属性であった。男女の間にも、長子と末子の間にも性格の差がみとめられた。これは親が、子どもが男児であるか女児であるかにより、あるいは長子であるか末子であるかにより、子どもに期待している役割りが異なつたものであることを示している。そのために、子どもに対する育児方法がちがひ、その結果性格に差が生ずると考えられる。親の役割り期待を支えているのは、かれらの育児観、子ども観であるが、さらにその根底には男女観を含む価値体系がある。その意味で第2、第3の属性も、間接的に幼児の性格に影響を与えているのである。

4. 7つの要素が幼児の性格になんらかの影響を与えていることを明らかにしたわけだが、その具体的な影響のしかた、異なつた性格が形成されてゆく過程、親の期待する役割りと子どもの性格の因果関係については、さらに精密な研究を待たなければならない。7つの要素それぞれについてみても、グルーピングはかなり粗雑であるし、それぞれのグループに属する人数もまちまちで、十分な検討がなされたとはいいがたいのである。いわば問題点を指示するための探索的な研究である。

付記 前述のように、この研究は名古屋大学医学部精神医学教室の総合研究の一環として行なわれたものであつて、研究班員の討論の成果である。村松教授をはじめとする研究班の諸氏に感謝する。さらにわれわれと同じグループに属し、共に調査研究に従事してきた精神医学

教室ソーシャル・ワーカーの金子寿子、仲野絢子、関根薫、庄司満紀子の諸姉は、実質的な共同研究者であることを付記し、感謝のことばにかえる。

付表1 テストカード説明と質問の例

カード3

ここは太郎さんのお家です。朝、太郎さんが眼をさましたところですよ。これはお母さんのおふとん。お母さんは、もう起きて、むこうの部屋でお仕事をしています。太郎さんは眼をさまして、おきあがりました。さあ、太郎さんはどうするでしょう。

カード11

太郎さんは、お友だちの家へ遊びにゆきました。これが太郎さん、これがお友だち。お友だちはきれいな大きい電車で遊んでいました。太郎さんが「ボクもいつしよに遊ばせて」といつたら、お友だちはこれは「ボクのオモチャだから、太郎さんはさわっちゃいけない。」といました。太郎さんはどうするでしょう。

カード15

太郎さんはそとで大勢のお友だちと仲よく遊んでいました。これが太郎さん。これとこれとこれはお友だち、そこへ、みんなの知らない子どもがきて、太郎さんに「ぼくもいれてくれよ」といました。太郎さんはどうするでしょう。

附表2 反応の判定基準の例

カード3

- + 自分ひとりで洋服を完全に着ることができる。
- 0 一部は自分で着られるが、完全に着るためには母親に手伝ってもらふ。
- 母親に着せてもらふ。母親をよぶ。母親の所へゆく。

カード11

- + 友だちをぶつたり、おもちゃをこわしたり、攻撃的な行動をする。
- 0 「一緒に遊ぼう」「貸してくれないか」など自分の要求を通そうとこころみる。友だちの家の人に訴える。
- 「家へ帰る」「さわらないで見てみる」など自分の要求を放棄する。

カード15

- + 遊びにいれていつしよに遊ぶ。
- 0 あまり乗気でないが、条件つきで（おもちゃにはさわらせないなど）いつしよに遊ぶ。
- いつしよに遊ぶことを拒む。いれてやらない。皆で逃げたり、その子を追ったり、その子から主人公がはなれようとする。

付表3 2人同胞の結果

	長 子				末 子				
	♂-♂ 弟ガイル		♂-♀ 妹ガイル		♀-♂ 兄ガイル		♀-♀ 姉ガイル		
男	18		6		8		18		
	m	SD	m	SD	m	SD	m	SD	
	Ind.—Dep.	.78	1.44	-.17	1.46	.88	2.47	.83	1.60
	Agg.—Wit.	.72	2.36	-.67	.94	-.63	2.29	-.89	.93
児	War.—Col.	-.44	1.26	-.67	1.11	.13	1.54	.06	1.27
	長 子				末 子				
	♀-♀ 妹ガイル		♀-♂ 弟ガイル		♀-♀ 姉ガイル		♂-♀ 兄ガイル		
女	14		16		10		8		
	m	SD	m	SD	m	SD	m	SD	
	Ind.—Dep.	.79	1.08	-.50	1.82	-.30	1.79	-.75	1.66
	Agg.—Wit.	-.71	1.62	-.50	1.50	-.90	1.45	-.88	2.32
児	War.—Col.	-.29	1.28	-.31	1.44	.40	1.43	-.25	1.30

文 献

(1) Baldwin, A. L. : *Behavior and Development in Childhood*. Dryden, 1955.

(2) Havighurst, R. et al. : A comparison of the Chicago and Harvard studies of social class differences in child rearing. *Amer. Sociol. Rev.*, 1950, 20, 438-446.

(3) 星野命他 : 育児様式とパーソナリティ (その一). *ICU 教育研究*, 1958, 5, 148~216.

(4) 稲田準子 : 児童の性格と親子関係. *児童心理*, 1953, 7, 785~89.

(5) 石黒大義他 : 溺愛・放任・専制. *児童心理*, 1954, 8, 226~35.

(6) 石黒大義他 : 乳幼児の育て方と人格形成. *児童心理と精神衛生*, 1954, 23, 6~14.

(7) 石黒大義他 : 母子関係の心理学的研究(4)—祖母と母親の育児態度の比較—. *日本福祉大学研究紀要*, 1957, 1, 74~86.

(8) 岩淵由之 : 親の態度と児童の性格. *児童心理*, 1954, 8, 1160~5.

(9) 水原泰介他 : 家庭での育て方と幼児のパーソナリティ. *児童心理と精神衛生*, 1953, 17, 23~36.

(10) 村松常雄 : 文化とパーソナリティとの関連—精神

病理学の立場からの interdisciplinary 研究—第24回日本心理学会大会論文集, 1960, 677~8.

(11) 長島貞夫 : 児童社会心理学—性格の社会的形成—. 牧書店, 1956.

(12) 成田錠一他 : 児童の訓練における社会, 経済的階層差. 第21回日本心理学会大会抄録, 1957.

(13) Orlansky, H. : Infant care and personality. *Psychol. Bull.*, 1949, 46, 1~48.

(14) Sears, R. R. et al. : Some child rearing antecedents of aggression and dependency in young children. *Genet. Psychol. Monogr.*, 1953, 47, 135-234.

(15) Sears, R. R. et al. : *Patterns of Child Rearing*. Row, Perterson, 1957.

(16) Sewell W. H. : Infant training and the personality of the child. *Amer. J. Sociol.*, 1952, 28, 150-59.

(17) Staples, R. et al. : Attitudes of grandmothers and mothers toward child rearing practices. *Child Developm.*, 1954, 25, 91-97.

(18) 谷嘉代子他 : 異性同胞中の子供について. *大阪市立大学家政学部紀要*, 1955, 35, 13~18.

(19) 辻正三他 : 児童における「家族好性序列」の意義に関する二・三の吟味. *教育心理学研究*, 1954, 2,

- 18~29.
- ⑳ 津守真：社会階級と子供の扱い方。児童心理と精神衛生, 1954, 22, 60~80.
- ㉑ 津守真他：乳児の精神発達に及ぼす育児態度の影響。教育心理学研究, 1958, 5, 14~24.
- ㉒ 津留宏：日本の母子関係—その心理的な問題—黎明書房, 1958.
- ㉓ 牛島義友他：施設と家庭における保育態度の研究。児童心理, 1953, 7, 806~13.
- ㉔ 牛島義友：家族関係の心理。金子書房, 1955.
- ㉕ White, M. S. : Social class differences in child rearing practices and child behavior. *Amer. Sociol. Rev.*, 1957, 22, 704-12.
- ㉖ Whiting, J. W. M. et al. : *Child Training and Personality*. Yale Univ. Press, 1953.
- ㉗ Wittenborn, J. R. et al. : A study of adoptive children. *Psychol. Monogr.*, 1956, 70, 1~58.
- ㉘ 矢吹愛子：家庭での育て方と幼児の性格。児童心理と精神衛生, 1954, 21, 11~22.
- ㉙ 山下俊郎：ひとりつ子の心理と教育。牧書店, 1958.
- ㉚ 依田 明：母子関係と幼児の性格。第24会日本心理学会大会論文集, 1960, 337.
- ㉛ 依田 新：家族の心理。培風館, 1958.

(1961年2月27日原稿受付)

ABSTRACTS*

LEVEL OF ASPIRATION AND PERSONALITY

by

Kiyoko Hoashi

Kawamura Junior College

Subjects were told to set levels of aspiration under four different social situations in pitching quoits. The four situations were: (1) to play individually, (2) to compete between two persons of the same ability, (3) to compete between a pair of good friends, (4) to compete between two randomly selected persons, from whom the best five were to be announced after competition. GDS' in each situation were recorded and the attitudes of shifting aspiration levels were observed.

We discriminated the following five patterns of attitudes.

Pattern A: Shifting levels upward and downward in accordance with success and failure, adjustable pattern.

Pattern B: Keeping same level regardless of their own performances, rigid pattern.

Pattern C: Shifting upward after failures and downward after successes, reactive pattern.

Pattern D: Setting much lower levels than performance, negative pattern.

Pattern E: Inconsistent pattern.

Comparison of those patterns with evaluation on certain personality traits of the subject revealed this:

(1) Those whose personality was secure showed Pattern A.

(2) Those who faced failure frankly showed Pattern A.

(3) Those who were satisfied with their own status also showed Pattern A.

(4) Those who were conciliatory varied attitudes in setting levels of aspiration according to the atmosphere of the situation.

(5) Those who were competitive had a tendency to adhere to the same levels of aspiration no matter what their own performance might be.

(6) Those who were evaluated as having good personalities showed wider goal discrepancy scores than those evaluated as having poor personalities.

(7) Attitudes in setting levels of aspiration did not widely vary within each person.

Upon the whole there was a considerable relationship between personality and level of aspiration behavior.

CHILD PERSONALITY AND CULTURAL BACKGROUND

by

Taketoshi Takuma & Akira Yoda

Gakushuin University

University of Tokyo

This research was done as a part of the synthetic research titled "Culture and Personality,"

which has been carried on by the Human Relations Interdisciplinary Research Group, Department of

* We owe editing of English abstracts in this issue to Dr. Ray Simpson of the University of Illinois.

Neuropsychiatry, Nagoya University School of Medicine, financially supported by Rockefeller Foundation. The chief of this research group is Prof. Muramatsu.

To study the personality of pre-school children, a new personal test was made. It consists of twenty picture cards. Each of the cards shows some situation which is familiar to young children. Presenting these cards one by one, a tester explains to a testee the situation in the picture. Then the tester asks him to tell what the child in the picture will do or is doing. The testee, a young child, describes the situation, identifying himself with the child in the picture. Therefore his personality can be somewhat revealed by his description. To find out the personality of the testee through his description is the purpose of this test. It might be said that this test is a kind of questionnaire modified for pre-school children.

176 children participated in this study. They were 4, 5, or 6-year-old children of kindergartens in one of the largest cities in Japan. Through this test we have studied how much effect the following seven factors had on the formation of a child's personality: the sex of a child, the age of a child, his position as a sibling, the age of his mother, his mother's academic career, the pattern of his family, and his family's social class. These seven factors could be divided into three groups according

to these attributes: 1) the child's attributes, 2) his mother's attributes, and 3) the attributes of his family. Relative to the child's personality the three aspects—aggression or withdrawal; warmth or coldness; and independence or dependence—were taken up.

The primary results of the study are the following. It was the child's attributes that had the greatest influence on the formation of his personality. For instance, boys are more independent and more aggressive than girls. As they grow, both boys and girls incline to independence, withdrawal, and warmth. Personality of the first children is different from that of the last. These findings indicate that the parents do not expect all of their children to take the same role. The expected role differs according to whether the child is a boy or a girl, and according to whether he is the first or not. One child is brought up differently from his brothers and sisters. The difference of rearing brings the difference of the personality.

The parents' attitudes toward child rearing depend on what they expect their child to be. And these attitudes may have a close relation with the second and the third attributes. In this sense, it can be said that even the second and third attributes had considerable indirect effect on the formation of child's personality.

STUDY ON SHIFTS OF DISCRIMINATION LEARNING IN CHILDREN

by

Sakae Suzuki

Tokyo University of Education

In the present experiment kindergarten children were used as subjects who were trained to choose the stimulus box containing a marble. The stimulus boxes were paired between those which differ in two dimensions, color and size, and presented simultaneously throughout the experiment. In the first learning situation, the Reversal Group was trained

on a color discrimination with a certain color, white or black, reinforced, whereas the Nonreversal Group was trained on a size discrimination with a certain size, the larger or the smaller, reinforced. When a certain criterion was met in the first learning situation, the second learning situation followed without any instruction. In the second learning situation,